＜デジタル発＞コロナ株の命名　ギリシャ文字は終わったの？

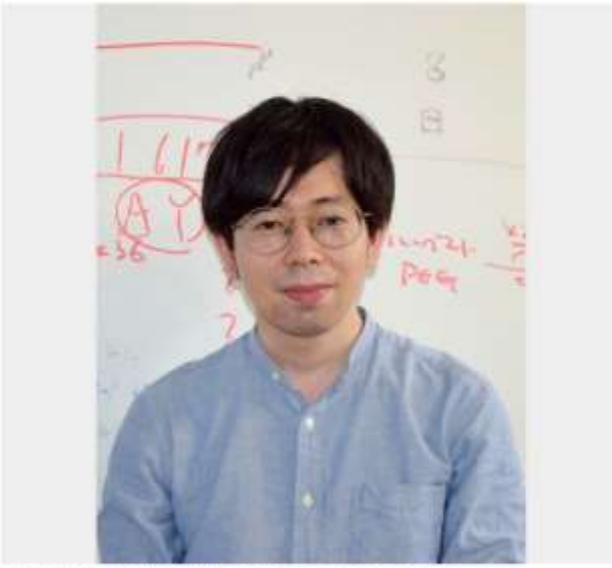
2022/6/4　　北海道新聞

ガンマにデルタ、オミクロン―。ギリシャ文字の呼び名をよく耳にする新型コロナウイルスの変異株ですが、最近は「ＢＡ．１」「ＢＡ．２」「ＸＥ」など英語のアルファベットや数字が入ったタイプが次々と現れ、「ＢＡ．２．１２．１」という何とも覚えにくい名前のウイルスも確認され始めています。一体どのように命名されているのでしょう。（編集委員宇野一征）

大型連休直前の４月２８日。厚生労働省は、仙台市内で新たな変異株を確認したと発表しました。感染力や症状の特徴とともに、その呼び名も注目を集めましたが、記者会見に臨んだ国立感染症研究所（東京）の斎藤智也感染症危機管理研究センター長はこう説明しました。

「分類は定まっていません。ほかの場所で見つかっているわけでも大きく広がっているわけでもなく、心配する状況ではないと思います」。同じタイプのウイルスが海外を含めて広く確認されているわけではないため、現時点で名前はつかないという見解を示したのです。

東大医科学研究所感染症国際研究センターの伊東潤平特任助教（３３）によれば、２０１９年の流行確認以降に誕生した新型コロナウイルスは約２千種類。多くは勢力を拡大できずに消えていきますが、見つかるたびに各国共通のデータベースに登録され、そのうちごく一部に限って世界保健機関（ＷＨＯ）がギリシャ文字の名前を充てているといいます。英国で最初に確認されたウイルスが２１年５月に**『アルファ株』と命名されてから最も新しいオミクロン株まで、ＷＨＯが命名したのはわずか１３種類に過ぎません。**



東大医科学研究所感染症国際研究センターの伊東潤平特任助教

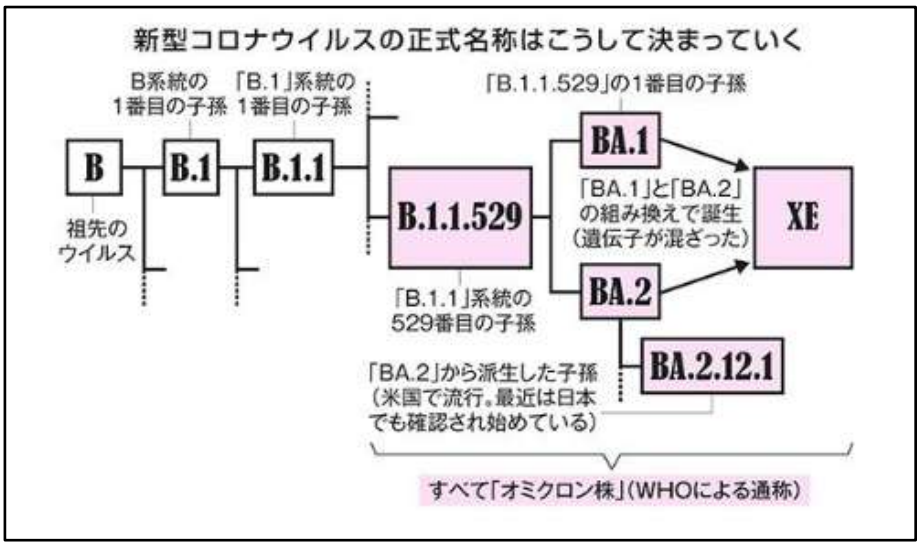
新型コロナウイルスの変異株にWHOが充てたギリシャ文字

文字	読み方	最初に発見された地域
α	アルファ	2020年9月　英国
β	ベータ	20年5月　南アフリカ
γ	ガンマ	20年11月　ブラジル
δ	デルタ	20年10月　インド
ε	イプシロン	20年3月　アメリカ
ζ	ゼータ	20年4月　ブラジル
η	イータ	20年12月　複数の国
θ	シータ	21年1月　フィリピン
ι	イオタ	20年11月　アメリカ
κ	カッパ	20年10月　インド
λ	ラムダ	20年8月　ペルー
μ	ミュー	21年1月　コロンビア
ν	ニュー	使われていない（英語の「ニュー（新しい）」との混同を避けたとされる）
ξ	クサイ	使われていない（英語で同じ表記をする中国人の名前「習」があるので避けたとされる）
ο	オミクロン	21年11月　複数の国
π	パイ	まだ使われていない
ρ	ロー	
σ	シグマ	
τ	タウ	
υ	ウプシロン	
φ	ファイ	
χ	カイ	
ψ	プサイ	
ω	オメガ	

伊藤特任助教はこう説明します。「ＷＨＯは、世界中に感染が拡大するような社会的リスクの大きいものだけに、広く注意喚起するため、正式名称にわかりやすい呼び名を付けていま

す」。WHOが名付けたのは「ニックネーム」のようなもの、というわけです。

　では、ギリシャ文字を充てられたウイルスたちの「本名」は―。実は、WHOが「オミクロン株」と命名したウイルスは「B．１．１．５２９」と呼ばれています。英国の研究者たちが２０年４月に提唱した「パンゴ・リニエージ（系統）」というコロナの国際的なルールに基づいて決められる学術名です。パンゴとは、たくさんのウイルスを一元管理するデータベースの名前からとったものです。



　これと同じように、WHOに命名されなかったウイルスにも英語のアルファベットと数字を組み合わせた名前がちゃんとあります。「.（ピリオド）」には子孫という意味があり、オミクロン株の名前からは「『B』という祖先から１番目の子孫『B．１』が生まれ、その子孫『B．１．１』から変異した５２９番目のウイルス」という情報を読み取ることができるようになっています。

　注目を集めているＢＡ．１やＢＡ．２もパンゴ系統の名前。それぞれオミクロン株から誕生した１、２番目の子孫ですが、「『.』でつなげる数字は三つまで。四つ目の数字をつけたら、それ以前をアルファベットで置き換える」というルールにより、オミクロン株を示す「B．１．１．５２９」の部分が「ＢＡ」に置き換わっています。新型コロナの派生型はたくさんあり、「Ａ～Ｚ」のアルファベットと、その後に続く「ＡＡ～ＡＺ」が全て使われていました。このため「ＢＡ」が充てられ、この後は「ＢＢ」「ＢＣ」…と続くことになります。５月２４日に東京都内で確認された「ＢＡ．２．１２．１」は、ＢＡ．２から派生した子孫に当たります。

新しい変異株が次々と誕生する中、体内で複数の変異株の遺伝子が混じり合って新しいタイプになるケースも出てきています。「人間や動物で言えば『混血』のようなものです」と伊東特任助教。研究者の間では「組み換え」と呼ばれ、パンゴ系統のルールではすべて冒頭に「Ｘ」がつきます。最近話題になっている「ＸＥ」もその一つ。ＢＡ．１とＢＡ．２が混じり合ったもので、他に「ＸＡ」「ＸＢ」「ＸＤ」なども誕生しています。

ＷＨＯの通称と学術名。二つの呼び名が混在している背景には、ウイルスが発見された国や地域がそのまま名前になり、思わぬ差別や被害を招いてはいけないという機運が、研究者らの間で高まっていることも大きいようです。前ＷＨＯ食品安全・人獣共通感染症部長の宮城島一明さん（６１）＝現イオン株式会社アドバイザー＝は、新型コロナにギリシャ

文字で名前を付けるＷＨＯの対応について「特定の地域や動物、食べ物の名前がウイルスについてしまうと、産業などにマイナスの影響を及ぼしかねない。そうなる前に中立的な名前をつけようという意図があります」と解説します。

宮城島さんはＷＨＯ勤務時代の１５年、新型コロナを含めたウイルスの命名に関するガイドラインの作成を主導。避けるべき用語として「過度の恐怖心をあおるもの」「人物名」などを盛り込んだほか、「短く、発音しやすいこと」「平易な用語が好まれる」などの留意点も明記しました。

さまざまな影響を考えながら決められているウイルスの呼び名。ガイドラインの冒頭にはＷＨＯのこんな決意が書かれています。**「いかなる文化、社会、国、地域、専門、民族のグループにも不快感を与えない」**

◇　前ＷＨＯ食品安全・人獣共通感染症部長の宮城島一明さんに、ガイドライン作成の思いや狙いを詳しく聞きました。

――ＷＨＯがガイドラインをまとめたのは２０１５年５月。何がきっかけだったのですか。

「ガイドラインをまとめる数年前、ドイツのシュマーレンベルグというまちで、ヒツジやヤギなど反すう性の家畜が次々と流産する病気が流行し、『シュマーレンベルグ病』と呼ばれました。その前には、メキシコを中心に流行が広がった新型インフルエンザが『メキシコ風邪』『豚風邪』などと呼ばれ、豚肉の消費が落ち込んだこともあります。こうした名前はそこに住む人たちが不名誉を被るだけではなく、観光や畜産などさまざまな産業にも悪影響をもたらします。固有名詞のついた病名は良くないと強く思うようになりました」

――「英国株」「インド株」などと呼ばれていた新型コロナウイルスの変異株の名前も、ギリシャ文字に変わりました。

「ガイドラインに準拠して、ＷＨＯが発信しました。変異株に国名などを冠する事例が続くと、新しい変異株が発見されても公表をためらう国が出てきかねません。その後の研究などでウイルスの発生した国が実は名前と違い、ぬれぎぬだったと分かっても取り返しのつかないことになります。ギリシャ文字を充てるのは、そうした事態を避ける意味もあります」

――なぜ英語のアルファベットではないのですか。

「英語は既に肝炎ウイルスなどにも使われているほか、あまりに一般的なのでピンとこない人が多い可能性などを考慮したのでしょう。パソコンなどでウイルスを検索する際、英語に比べて探しやすいことなども踏まえたとみられます」

――ガイドラインには「いかなる文化、社会、国、地域、専門、民族グループにも不快感を与えない」と明記されています。

「近年はウイルス名に使われた地域が関係する国際機関に抗議するケースも出ており、『中立的な名前をつける』というのが世界的な流れになっていると思います。野生のコウモリが由来とされる新型コロナウイルスのような『人獣共通感染症』は、いつ新たに発生しても不思議ではありません。メディアや、ウイルスに関する研究論文を発表する医師など情報を発信する側は、特に注意を払っていただきたいと思います」